

人生をぬいた
柔道家たち
BY THE
JUDO

人生の一時期を
ただひたすら柔道に打ち込んだ
そんな人たちの現在の生き方
そして人生を注目してみたい

(名古屋大学医学部教授)

二村 雄次

二村雄次医学博士は、名古屋大学医学部の外科学教室の教授として毎日、診察に手術に、また講義にと多忙な時を送っている。腹部のガン手術のスペシャリストとして著名である。とにかく柔道が大好きで、現在も「週2回は練習をやり、ウエイトトレーニングもやっている」だけあってガッチリと引き締まった体つきだ。ときに12時間もの大手術も行なう。根をつめ、神経を張り詰める手術に必要なのは体力だ。「私は粘っこい寝技の柔道が専門なので、手術も粘っこいな、と人から言われる」と二村先生は言う。現在も医師柔道大会で活躍し、昨年まで3連勝、今年は2位(40歳後半の部)という頼もしいお医者さんだ。柔道で鍛えた体力と気力で今日もメスを握る。(文◎木村秀和)



大学時代のハイライト。3年の時、七帝戦に優勝し恩師の岡野師範（前列中央）と喜びの二村選手（前列右端）

立ち技がダメでも寝技がある。
そんな奥の深さにひかれて……

二村先生と柔道は相性がいいのだと思う。小・中学校時代は運動に無縁の少年だったのが、もう30年以上も親密につき合っているのだから。「僕は勉強も運動も秀でている方じゃなかった。かけこは遅いしね。中学頃までは友だちとぶらぶら遊び回るだけの子供だったんです」

そんな二村少年が柔道と出会ったのは昭和34年、高校へ入学してからだ。「旭丘高校というのは、パンカラな気風の学校で、必ず運動クラブに入ることが義務づけられていた。そういうのは案外好きで、結局柔道が自分にいちばん合っていたということかな。柔道というのは立ち技がダメなら寝技がある。研究するにはいい題材なんですね。そのへんが僕の性格と合っていたんでしょう」

柔道部へ入部するとその奥の深さが二村少年をとりこにした。「僕は立ち技はトロくてダメだったのでやっぱり寝技を研究しました。そういうのが長続きしている原因になったんでしょうね」

柔道部の練習は楽しかった。「毎日奴隷みたいな生活でしたね。師範が

しょっちゅうは来てくれなかったの
で上級生から指導を受けるんですが、
柔道そのものよりお説教の方が長か
った」と苦笑する。

その反動？ で、大学へ入学する
頃は考える柔道家となり、とうとう
寝技で縦四方固めに入る“木登り”
という技を編み出してしまった。これ
は後述する。

県民大会で6人抜きの快挙。
中京大からスカウトの手が

とにかく、毎日先輩のしごきに遭
いながらも、二村少年は、柔道に没
頭。「勉強するひまはなかった……」
3年時のクラス担任であった江藤千
秋先生の「やりたいことをやれ。大
学は浪人しろよ」の一言で気が楽に
なり、大学受験は浪人を決意。「と
にかく、その通り！浪。でも、夏頃
まで何とはなしに後輩に柔道教えたり、
ソフトボールなんかやっていて「先
輩、俺たちのことはいいから、勉強
してくださいよー」なんて言われて
しまいました」

のんびりとしていたのだ。でも、
難しく、精密な手術をやる人間は
このくらいの神経があった方がいい
のでは、と思う。その意味では外科

医は天職だろう。

つらいことばかりではない。高校
時代のハイライトは2年の秋にやっ
てくる。

「県民大会の7人制の団体戦で僕は
次鋒で出て6人、大将まで抜いちゃ
った。嬉しかったですね。でも根が
トロいせいか、次の試合では手がか
ちかちでコロッと負けちゃった」

後日談がある。翌日、東海地区で
も強豪だった中京大から父親のもと
へ、特待生として大学へ来ないか、
というスカウトがあったという。

「これは僕が大学へ入ってから父親
（稽さん=78歳）に「実はな……」と打
ち明けられたんです」

——それを聞いて、けっこう嬉しか
ったのでは？

「はい。おれは柔道家としてめしを
食おうかと一瞬考えたりして」

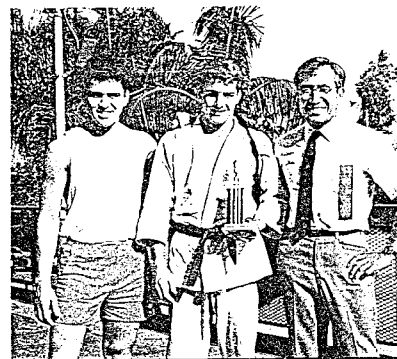
**柔道を通じての人のつきあいが
人生観を豊かにしてくれる**

高校時代、稽古ばっかりという記
憶しかないという二村先生だが、そ
れだけに、その後の人生に得た糧も
大きいものがある。

「その頃の仲間は今でも非常に仲良
くつき合っているし、一生の友だち
ですね。先輩は今でも怖いですよ。
でも、今は医者ですから、よく面倒
みてやっています。後輩なんかもケガ
するとすぐ来ますから……」

加えて、社会のいろいろな分野へ
巣立っていった先輩、後輩、同輩と
のつき合いは、医者としての人生観
まで豊かにしてくれると言う。

「医者の世界というのは、案外狭い



昭和62年9月から10ヵ月間、米国UCLA留学
大学の柔道の教え子が好成績をあげ満足の笑み



PROFILE

にむら・ゆうじ—昭和18年6月13日、名古屋生まれ、49歳。昭和34年、旭丘高校入学と同時に柔道を始める。1浪後、昭和38年名古屋大学医学部に入学。大学時代は寝技を得意とし、自ら“木登り”という縦四方固めに入る技を開発する。昭和62年9月～63年6月まで米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校へ文部省在外研究員として留学。勉学の合間に柔道を教える。現在、名古屋大学医学部第1外科学教室教授として主にガン手術にたずさわっている。家族は陽子夫人(44歳)と雄介(中1)、純次(小4)、広太郎(小2)君の4人。名古屋大学柔道部部长、3段。医博。

もんでねえ、精神的に未発達な人がいる場合もある。世間が狭いというか……。その意味では、僕なんか、柔道を通して、違う世界の人たちとつき合えるので非常に勉強になります。性格的にもマイルドになったと思いますしね」

これは大学の柔道部、その他柔道関係者とのつき合いももちろん入っていると言う。

もっと具体的なメリットも二村先生はあげた。「外科医というのは長時間の手術もやらなくてはならないし、集中力も必要でしょう。そんな時に柔道をやっているありがたいなあと思うんです。僕は40歳ぐらいまでは10時間以上の手術をしょっちゅうやっていたけど何ともなかった。体力がモノをいうわけですよ」

「最近でこそ、手術で意地を張って10時間、12時間というのはやめています、その代わり若い人を育てて、チーム全体でひとつの成果へ向かって全力をあげる方式を取り入れているんです。これは柔道の団体戦みたいなものです。それぞれの持ち味を十分発揮する、またさせるように気を配るということですかねえ。何人かがチームを組んで気持ちをひとつにするというのは非常に大切なんですが、こういった点も柔道から学んだような気がします」

昭和38年4月、二村先生は後輩の励まし? もあってか、無事名古屋大学の医学部へ進学した。家業が薬局だったことも医学を志した遠因だった。でも最大の要因は……。

「1度、名古屋柔道部の岡野好太郎師範(10段)が高校の時、実技の指導に

来られたことがあったんです。その時に抑え込まれたらピクリとも動けなかった。当時岡野先生は70歳後半ですよ。涼しい顔で力も入れていないようなのに動けない。その時から、教えてもらったら岡野師範みたいな人に、というんでとうとう名大を受験することになったんです」

相当、頭の中は柔道で占められていたのだろう。

右耳がつぶれているのは後輩に寝技を教えた稽古台の名残り

大学時代の二村先生は「寝技が90%」というほど異色の選手だった。「私はトロいもんで、立ち技はダメ。性格的にも粘っこく攻める方だから寝技が合っていたんです。岡野師範は僕が5年の時に亡くなったんですが、それまで毎日の寝技は直伝でした。だから僕の寝技は直伝です」

その甲斐あって、学生時代の二村先生は、“寝技の二村”、“絞めの二村”と近隣、東海地区柔道界では鳴らしていた。その変形ぶりゆえに、公式試合では判定で相当不公平だと思うようなケースも経験したと言う。いわゆる「引き込み注意」とられてし

まうのだ。

「でも、名大全体は岡野師範仕込みの寝技が売り物でしたから、我々も必死になって寝技を磨いたものです」

その結果、編み出したのが前述の木登り。「双手刈りで倒した仰向けの相手の両ヒザを素早く極めるんです。そうしてじわじわと登って行って縦四方に固める——格好悪い勝ち方なんですけど、これを2年頃開発したおかげで、七帯戦(北海道大から九州大など旧7帝国大学の定期戦)なんか負けたことなかったですね。相手にとったら、しつこくていやしかったと思いますよ」

昭和40年の七帯戦では二村先生の活躍もあって優勝も経験している。

その後、3年、4年と左右のヒザを負傷したこともあって、がむしゃらな練習はできなくなったが、その分、後輩の稽古台になってやる時間もふえた。二村先生の右耳はつぶれているが「後輩に寝技を教えてやった時の名残り」と言う。

昭和44年、医学部を卒業、以来外科医として各種の学会の評議員や会員として活躍するとともに後輩に外科学を教えている。所属の学会約20。昭和60年からは母校名大の柔道部の部長も務めている。

「現在男子20人、女子4人。これをもう少しふやして、強くしたい」というのが当面の抱負とか。

インタビューの最後にアルバムを見せてもらったが、その表紙には、「MEIN KAMPF(我闘争)」と誇りと感慨を込めて記してあった。

残念なのは、3人の男の子のだけでも柔道をやってくれないこと。「痛いからいやだなんて言うんです。仕方ないですね」



若い医師と肝臓ガンのレントゲン写真を見ながら病状を後述する二村医師ら密に目の患者を救う